

映画「ヒロシマ・モナムール」鑑賞記

佐々木 真理

(Facebookより転載：2017.3.5～3.6)

映画「ヒロシマ・モナムール」（脚本：マルグリット・デュラス、監督：アラン・レネ）を観にいきました。

主演のエマニュエル・リヴァさんが今年1月に89歳で亡くなられ、その追悼上映でした。

以下 長文失礼

私は「フランス語のテキストを読む会」に参加しており、今「ヒロシマ・モナムール」を読み進めています。そこで一緒に友人と観に行ったのです。

ということは、まず！腹ごしらえです！（笑） デミグラスソースが美味しい広島のお店「レストラン・ミクニ」で、早い昼食を取り、胃袋が満足したところで「モナムール」へGO！（くどくないけどコクのある美味しいデミグラスソースで大満足！）

会ではこの教材を始めるにあたり、DVDで一通り鑑賞しました。しかし上映の環境が良くなかったので画面が見え辛く、しかも英語字幕だったため英文を追う（読む能力もないのに）ことに必死になり（途中で諦めた）、その字幕すら見えないことも多々あり（読む能力ないから関係ないのだが）、「？」なままテキストに突入した次第です。

テキストを読み始めると（正確には‘先生の訳を聞いてみると’）、猛烈に読み辛い。これが脚本であるせいか？デュラスがこういう書き方をする人だからなのか？早々に、この教室にいる私の存在理由・意義（せめてかっちよく言ってみよう ‘raison d’être’）を考える羽目になりました。あーだこーだ考えているうちに、舟を漕ぎ出でてしまい、「あら、潮に流されてこんなところにまで来てしまったわ・・・」と途方に暮れることも、しば・・・しば・・・。

細かい部分は役者と作っていく脚本家と、自分の求めるところに持っていくために細部の細部にわたり指示していく脚本家がいるのではないかと思います。もちろんデュラスは後者です。この作品のト書きの細かさ・執拗さといったら凄くて、私の大雑把な頭では理解できないことが多いのです。役者さんって、こんな難解な脚本読んで、理解して、身に沁み込ませて演じるのかと、心から尊敬しました。演じる人にとっては、このト書きが命のはず。でも、ただ鑑賞する者にとってはなかなか辛いのです。

作品の内容も私の不得意分野の恋愛物（後にこの一言で片づけられるものではないことが分かる）みたいだし、しかも行きずりの鯉・・・いや恋という私にとって全く現実味のないことだったりして、いよいよ遠洋に船出してしまいそうな勢いでした。マグロも釣れるかも。大漁の予感。

そんな折、この追悼上映を観ることができたのは、まさに渡りに舟、遠洋までよく助けに来てくださいましたと感謝したのであります。DVD→テキスト（まだ途中）と航海したところで、この映画を再度観ることで、印象など違った感想を持つことができるのかしら？そういう思いがありました。

さて、私は遠洋の航海から戻ってこれるのか？

まだ本題に入っていないことに驚きつつ、今日はこの辺にしといてやろう。

(2017.3.5、11:28)

さて。

何が「さて」というと、3/6に投稿した「ヒロシマ・モナムール」を観に行ったという話です。

この映画は1959年日仏合作で、脚本：マルグリッド・デュラス、監督：アラン・レネ。

平和に関する映画の撮影のために広島を訪れたフランス人女優がある日本人男性と行きずりの鯉を釣り・・・いや恋をします。女は戦時中独兵と恋に落ち、終戦とともにその恋人は殺され、女は丸刈りにされさらし者にされます。それを恥じた家族により彼女は地下室に閉じ込められます。髪もある程度伸びたある日（1年以上かかっている）、ひとりでパリに行くようお金を持たされます。女優になった経緯も、来日して日本人男性と出会った経緯も書かれていません。内容には関係ないというか影響ないことです。実は、家庭持ちの男女の行きずりの恋ということに対して、「その手の話ですか。」と多少引っ掛かっていたのですが、映画を観終わった後、内容に関係ないのだと納得できました。どうでもいいことなのです。

ざっくり言ってしまえば、この二人のたった1日の情事の話なのですが（そのため邦題が「24時間の情事」となっていることが、私としてはちょっと残念）、この短い間の描写に込められたのは、戦争の恐ろしさとそれに伴う記憶と忘却の話なのかなあと自分なりに解釈しました。戦争の恐ろしさの描写は、原爆資料館の展示などの映像以外は目を覆うような惨いものはありません。しかし丸刈りにされた経験を持つ女の悲惨な記憶（恋人と共に死ねなかった、つまり愛によって死ねないことを知った自分に対する感情も含め）と、その記憶を消したいという思い、一方で恋人を忘れてしまいそうな、理性を取り戻しそうな自分への苛立ちなどが表されることで戦争の恐ろしさを十分に伝えていると思います。また欧米の人たちにとって「体の相性」というのは重要なんだなあと思えました。映画の中にそういう表現が何度か出てきたのです。ギリシャ神話の「人間は失くされた半身を求める」という話を思い出したのは私だけでしょうか？探しすぎでしょって思うのですが。このヒロインも、恋人を無残な方法で失って以来、それに代わるものを探していたのかとも思えました。忘れたいのに忘れられない、でも着実に忘れることができつつある、それなのに忘れてしまうのは怖い。元恋人、戦争。しかし、忘れることができるのだと分かることで、自己を解放でき、希望も生まれる。また、忘れてしまうから繰り返す・・・。最後の場面女「あなたを忘れてみせる！もう忘れてるわ！見てよ、　　どんなにあなたを忘れてるか！私を見て！」「ヒ・ロ・シ・マ。ヒ・ロ・シ・マ。それがあなたの　　名。」男「それはぼくの名。そうだね。そして、君の名はヌ・ヴェ　　ール。フラン・ス・のヌ・ヴェール。」

心に残るラストですが、私の心の片隅で「・・・やっぱりフランス人は　　”ひ”って発音できないんだな」という声が・・・。

今日はこのくらいにしておいてやろう。

A suivre.

(2017.3.6、12:57)

いかん！だんだん真面目になってきた！自分らしさを取り戻さなくては！

何のことかって？「ヒロシマ・モナムール」の感想です～。映画の内容的にやっぱり真面目になっちゃいます。

テキストを読み始めた時、女は結局フランスに帰ると思いました。殺されたあのドイツ兵の恋人を愛しているから。映画を観終わって、やはり女はフランスに帰るだろうと思いました。それは、日本人男に出会い、自らの過去の苦悩を告白したことで解放され自信を持ったから。

この1日で、二人は、出会いはどうであれ、お互いに心から惹かれあったに違いないと思います。でも、日本人男に会って、元恋人をそして自分の辛い過去を忘れていき日本人男を本気で愛するようになっていく事実、戸惑いながらも希望を見出していった

に違いないと思うのです。希望というのは、今愛しているこの日本人男のことも忘れることができるという自信を持つことができたということです。男もそんな彼女を理解したのだと思います。一方戦争についてはどうか。人間は、こんなにも悲惨なことも忘れてしまうがゆえに、古より繰り返してきました。最近の情勢を見ても、人間はこれかも性懲りもなく繰り返していきそうなそんな気配を感じます。

さて、主演女優のリヴァさんは、この映画の撮影の傍ら、たくさんの写真を撮っていました。1958年当時の広島の様子が生き生きと伝わってくる素晴らしい写真の数々です。考慮の上か天性のものか、構図も面白く、プロが撮ったような作品です。映画の公開から50年後、これらの写真は写真集「HIROSHIMA 1958」となって出版されました。私の生まれるたった5年前の広島。感慨深いものがあります。

なんか長い書いたねえ、私。

この日本人男性、彼女のヌヴェールの話を聞いて、相当衝撃うけたでしょうね……。二人ともヌヴェールの霧に包まれたよう。

最後の方、広島駅でお婆さんを挟んで二人が座ってるシーン……。要りますか？あの場面だけは、見ていたたまれなくなったのですが、他の人はどうなのでしょう？急に男が話す日本語が棒読みみたいに聞こえて……。わざと？……

老婆「この人は何処の人なんです？」

男「フランスの人です」

老婆「どうなさったんです？」

男「この人はもうすぐ日本を発つんです。私たちは分かれるのが悲しいものですから。」

……。う～ん……。でも、デュラスのこと、レネのこと、何か意図があるのか……。？？日本語が分からないから岡田さん（男優さん）の棒読み状態に気が付かなかったとか……。いやいや……。そんなことは……

感想より前振りの方が書いてて楽しかったかも。

めでたく長い航海から帰ってきつつあります。帰港まではもう少しありますが。

おや、講義は明日ですよ。

ん？時化の予感？いやいや……。そんなことは……

(2017.3.6、18:41)